

研究ノート

「子ども」をめぐるレトリック

——二つの「子どもの発見」から始めて——

山 本 妙

『イギリス児童文学の作家たち』(1975) という書物の序論の冒頭で、猪熊葉子氏は次のように述べている。

「近代」にはいくつかの特徴があるが、そのひとつに、「子どもの発見」を数えてもいいだろう¹。

教育学や歴史学の分野でも一定の意味を担うタームとして了解されていると思われる「子どもの発見」という言葉は、近代の英文学・英国文化を扱った書物でもしばしば使われてきた。近代の特徴として「子どもの発見」を数えるということは一般に了解され、この言葉は一人歩きし始めているようだ。²しかし、同じく「子どもの発見」といいながら、この言葉は、論者により、大きく分けて二通りの異なったニュアンスを帯びて使われて来たように思われる。ここでは、この「子どもの発見」という概念を扱った著述をいくつか見ることから始めて、「子ども」をめぐるテキストのレトリックについて考えてみたい。

二つの「子どもの発見」——カヴニーとアリエス

特に英国の文化や文学を論ずる文脈の中で、「子どもの発見」というとき、それは主に19世紀の初頭以降、英文学作品において子どもが独特のイメージを背負い、あるいは中心的な役割を担って、頻繁に登場するようになったと

いう事象をさす。そこでクローズアップされるのは、ルソーの著述活動によって大きな転換を見、英国ロマン派詩人の作品によってさらに確立・定着したと一般にいわれる子ども像である。「子どもの発見」とはすなわち、この場合、ただ小さな大人であるとか、未熟な存在、大人の予備軍として見られる存在ではなく、それ自身で価値のある存在としての「子ども」の発見ということを意味する。猪熊氏の、先の引用に続く著述部分において、そのあたりの理解はもっとも単純化し、わかりやすくした形でまとめられている。

長い間大人は自分たちの身近かにいた子どもの価値に気づかなかった。成熟した「大人」が一人前の人間であるとみなされるならば、あらゆる点で大人に及ばない子どもは「未熟」であり、半人前である。大人の責任は、そのような子どもを一日も早く一人前の有用な大人に育て上げることにあった。このような児童観に立つかぎり、子どもの価値は発見されることがない。

だが一八世紀の末になって、子どもが大人とかなり異なる生物であること、そしてその異なっている部分こそ人間を人間たらしめる部分であること、それを大人たちは失ってしまったことで非人間的になりつつあることを発見した大人たちが出現した。

子どもの生活は行動的で喜びにみち、明るさに輝いている。それは子どもが大人の失ってしまった想像力や感受性の豊かさを失っていないからである。それまで大人達が看過していた子どもの価値の発見に功績があったのは、イギリス・ローマン派の詩人たちであった。³

英文学における子ども像に対するこうしたアプローチは、1957年に著され、1967年にF.R.リーヴィスの序文をつけて改題・再版されたピーター・カヴニーの *The Image of Childhood: The Individual and Society: A Study of the Theme in English Literature* を嚆矢とするといつてよいだろう⁴。その前後にも、子ど

ものイメージの変遷を取り扱った研究がなかったわけではない。しかしカヴニーは、18世紀以前に遡って思潮の変化を述べた上、ルソーからブレイク、ワーズワスと辿って、「大詩人たちが非常に重要だと思ったことを、子どものイメージを通して表現するという事態」⁵が起こったことを、産業革命の発展に伴って起こって来た社会の変化とからめて、鮮やかに際立たせて説明した。序文からカヴニーの言葉を借りるならば、ブレイクやワーズワス、そしてディッケンズのような文学者にとって、「無垢」な子どもは、「まことに不愉快な姿で発展を続ける社会への芸術家の不満のシンボル」、「ひろく社会全体にみなぎってはげしく人間性を蝕んでゆく力に対抗する『自然』のシンボル」⁶となったのである。続いてカヴニーはブロンテ、ジョージ・エリオット、マーク・トウェインらにおける子ども像を論じ、さらに、19世紀後半になると、「子ども」のイメージが、単に感傷的な作家の逃避・退行願望の表象でしかなくなるということを指摘してこれを批判する。ついでフロイトを経由してジョイス、ウルフまで筆を進めて、ロレンスを子どもを描いた偉大な天才の一人として論じて筆を措いている。

その問題設定の仕方の手際と、取りあげられた作品の幅広さ、豊富な引用を駆使しての説得的な論述などによって、カヴニーの研究は、この分野において、他に並ぶもののないものとなった。カヴニー自身は「子どもの発見」という言葉を特に意識して使ってはいないが、上述のような子ども像の変化が共通の理解となっているという事情の裏には、彼の研究の影響が大きく関わっていると考えてよいと思う。しかし、「子どもの発見」という言葉や概念が近代の特徴の一つとして広く流布・浸透した事情を考える際に、もう一つ忘れるわけにいかない著作がある。フランスの「日曜歴史家」フィリップ・アリエスの『〈子供〉の誕生』である。

1960年に『アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』というフランス語のタイトルで出版されたアリエスの本は、1962年に *Centuries of Childhood* というタイトルで英訳され、大きな反響を呼んだ。この本の中でアリエスは、

今日我々が見るような、子どもを中心として親子が情愛の絆で結ばれている家族の形態は中世にあっては殆ど存在せず、家族のメンバーはより大きな共同体の構成要員として組み込まれていた、と論じる。子どもの死亡率は極めて高く、子どもはすぐ死んでしまうので別の子どもでその存在が埋め合わせられるという、いわば「交換可能」な存在であった。生き延びた子どもも、早くから乳母に預けられて育てられたり、一定の年齢に達すると徒弟にやられたりして、親子の情愛は育ちにくかった。そしてある程度成長すると、子どもは共同体の一員として、労働も遊びも大人と共有するようになっていった。このような社会では、子どもを大人と区別し、特に教育しなければならないという意識もなく、一種の気楽な無関心というべき態度が支配していた。

しかし、アリエスによれば13世紀の初め頃から長い時間をかけて、こうした状況は変わり始め、16世紀から17世紀にかけて、子どもが「子ども」としてその存在を認識されるようになる。アリエスはそうした人々の子どもに対する感じ方の変化を、書簡や、家族の肖像を始めとする絵画の中に跡づける。例えば17世紀に生きたセヴィニエ夫人が、孫娘のかわいさを長々と述べている書簡を引いて、彼はこのように解説する。

多くの母親や乳母たちは、(子どものかわいらしさについて)すでにこのように感じるようになってはいた。だが、こうした感情がこれほどまで表現するに値するとは、だれにも考えられなかったのである。文学の中でのこれらの子どもの情景は、同時代の風俗を描いた絵画や版画のそれに対応している。その身体、その習性、その舌の回らぬ喋り方を含めて、幼児期が発見されたのである⁷。

こうした子どもに対する見方の変化は、宗教家たちによる学校の改革運動や、伝統的な大家族の形態や共同体が崩壊し、まずブルジョア階級において、強い家族間の情愛で結ばれた近代の核家族が形作られるようになったことなど

と平行して起こってきたとアリエスは述べる。そこから、子どもに対する「かわいがり」と厳しい「しつけ=教育」という二つの態度が生まれてくる。かくして、近代の学校は大人の世界から子どもを引き上げ、隔離し、子ども期を長引かせて「教育」することとなる。つまりアリエスは、子どもの発見とそれ以降の近代の子ども観の変遷を、アンシャン・レジーム期の「快活な無関心」から、学校と家族による管理と「閉じこめ」への移行として批判的に見る。結局近代において勝利をしめたのは個人ではなく、家族だったのだ、というアリエスは、人々が家族の内側に向いてしまい、共同体の「絆」が断ち切られたという意味で、近代のシステムの成立を惜しむのである。

その後、中世の人々も子どもに冷淡ではなかったという反論や、逆にアリエスの説は中世への懐古趣味だという批判もでた。アリエスの見直しの必要がいられている、という⁸。しかし、私の興味は教育史学、歴史学的にみたアリエスの仕事の厳密な評価を定めることにはない。アリエスの仕事に対する評価の中で私にとって興味深いのは、たとえば親子の関係であるとか、「子ども」の本質など、我々には自明のことと感じられていること、本来人間の特性に固有であって「真理」に属すると思われるような事柄や概念も、実は様々な要因によって非常に長いスパンで起こってきている、人間の心性の変化の一つの相なのではないか、ということ将我々に知らせる役割を果たした、という点である。

アリエスの著作のこうした性格は、歴史社会学などの分野、中でもフェミニズムの立場に立った家族論や女性論の中で、利用されたようである。ジェンダーによる性格づけや役割分担などについての観念は、原始に遡れるようなものではなく、近代以後、労働（生産）と家庭（再生産）の場の分極化と女性と子どもの家庭の中への囲い込みによって起こってきたのだ、ということは半ば常識と化している。同様の文脈において、不易であると思われた家族の形態や情緒的絆の意外な歴史の浅さを露呈させたという点で、画期的であった著作として、アリエスの仕事は引き合いに出された。落合美恵子氏の

著作に見える、我々が自明としてきた父、母、子の関係が、「いかに心安らぐ人間本来の理想と映ろうとも、逆に、いくらもがいても抜け出せない愛憎の檻と見えようとも、それはたかだか二百年、大衆レベルではわずかに百年から六十年の歴史しかもっていない」⁹といった文章を読むとき、私は、「アリエス効果」は十分活用されている、と感じざるを得ない。しかし、あらゆる分野で、アリエス以後、そのインパクトをうけとめ、歴史的相対化を深めるという立場で子どもをめぐる言説やテキストが論じられたかという、そうではなさそうだ。¹⁰

カヴニーとその後

ここでもう一度カヴニーに戻ろう。もちろんカヴニーがその著作を世に出した時にはアリエスの本は出ていなかったのだから、そのインパクトはこの本の中に求めるべくもない。そしてまた、カヴニーの著作を子細に読むと、彼はアリエスとそう異なった前提や方法で仕事を進めているわけでもない。カヴニーがその大部の著作で行ったことは、子どもがどんなものであるかを19世紀以降の英国文学を通じて追求することではなく、作家や詩人がいかに子どものイメージを使って自分たちが「非常に重要だと思ったこと」を表現したかを、豊富に作品を引用しながら描き出し、それに彼独自の人生観・芸術観をもって評価を加えていくということであった。一般的な定義を嫌い、個々の作品に語らせようとするカヴニーの姿勢が、子どもはどんなものである(べき)かといった議論をすることは避けさせている。しかし一方で、ロマン派の巨匠たちにおける子どものイメージを強く肯定し、後に見られる、感傷主義に媚びて作家の逃避的人生観を表す道具と化した憂うべき例と峻別して、彼の人生観をからめてあまりに説得的に語ったため、ロマン派の子ども観こそあるべき子どもの姿であり、あとは未熟な理解ないし墮落だという感覚を生むことになったという可能性は否めない。そして、カヴニーの敷いた道筋を、定説のように「子どもの発見」というタームが通っていくように

なったとき、「子どもの発見」という言葉には、アリエスの拓いた方向とはまったく逆のベクトルへと考え方の展開する可能性も生まれてしまった。冒頭に挙げた猪熊氏の文章に、その一例を見ることができる。また、別の書物の中で、川村民部氏はロマン派における子どものイメージの誕生について次のように述べる。

もともと子どもは決して論理的な存在でも、理性的な存在でもないがゆえに、古来世界文学史上中心的存在として扱われることは殆どなく、たとえ注意を払われたとしても、主としてキリスト教の原罪観と結び付けられ「墮落」した存在として、大人同様にみなされてきたのであった。伝統的に無視され続けてきた子どもは、さらに理性を重んじる当時の近代合理主義精神の犠牲となったのである。

ところが、人間というものが単に理性のみで成り立つものではないように、「自然」＝「理性」という等式も、いつまでも威力を発揮することはできないで、十八世紀の後半になると次第に変化を来すことになる。・・・

こうなると、その本性が「自然」であり、感覚的存在である子どもが、「理性」から解放され、「原罪」から解放されて、いちはやく文学に登場してきたとしても不思議ではない。これまでの合理的で人工的な子ども教育を厳しく批判し、自然による子ども教育の必要性を論じたルソーの『エミール』(1762)こそ、こうした子ども像の嚆矢であった。¹¹

扱われる国や社会によって時期的な差があるとしても、近代が「子ども」を析出したという考え方はアリエスにもカヴニーにも共通している。しかし、アリエスの著作は、自明と思われた「子ども」像が結構歴史の浅い近代の産物だということを、子ども中心の近代システムの批判という文脈の中で語っ

ており、その結果、彼の影響を引き継いだと見なされる研究や著述には我々の「子ども」へのまなごしを相対化し、問い直そうという傾向が強い。それに対し、カヴニーの流れを汲んで英国文学における子どものイメージを論じていると見なされる猪熊、川村氏の文章のレトリックには、アリエス（と、その影響を受けて書かれたもの）の立場からは出てこない前提が見え隠れするように思われる。まず、それまで看過されてきた「子どもの価値」が発見された、すなわちもともと存在していたのに〈認められなかった〉子どもなるものの本質や価値がある、ということ。そして、子どもは「無視され続け」、「当時の近代合理主義精神の犠牲」となっていたのだが、ここにいたってその価値が初めて認められ、描かれることになった、という、〈暗黒の時代〉から〈啓かれた〉状態へ、無知と無理解から正しい認識・理解へと子ども観が〈進歩〉したという考えである。「子どもの発見」を歴史の中の一事件として見るとしても、このような立場に立つならば、近代に発達した「子ども」の概念を流動と変遷の中で見るよりはむしろ、近代の（あるいはロマン派的な）子どものイメージを絶対的、本質的なものとして固定、静止させることになってしまいはしないだろうか。

もちろんこれはカヴニーの本より遥かに短い紙数でまとめられた文章の中で、カヴニーが言葉を選んで慎重に論を運んで論証したことを、いわば定説を簡単におさらいするという形で書かれた部分であり、言葉遣いも端折らざるを得なかったに違いない。しかし私は、両氏の論文の内容とは関係なしに、ただ上の引用部分が「定説のおさらい」として書かれ得、一般読者に受け入れられるという点にこだわりたい。そのような「おさらい」が可能だということは、現代の我々にも、子どもとは本来どういうものかという本質論めいた概念や感覚があつて、それがどうやら、自然に関する感覚も含めて、このロマン派の子ども像あたりに根ざしており、その物差しを我々は未だに使っているらしい、ということの証左ではないかと思われるからである。それでいて、我々は我々がその中にある思考の枠組みを意識し、それがどのあたり

に端を発するものかを考えることがあまりないのではなかろうか¹²。

子どもをめぐるレトリック

「子どもの発見」をめぐる二つの立場を紹介したのは、どちらがより望ましい「子ども」の把握の仕方かをここで論じるのが目的ではない。ただ、同じ時期に端を発し、使われてきた言葉でありながら、テキストのレトリックによってこれほど異なって見える立場が展開される例を、私は他にあまり知らない。

アリエスの、放任されていた状態から家族と学校の中への囲い込みという筋書きも、強力なレトリックを駆使した一つの歴史の解釈に他ならないし、先に挙げた落合氏の文章のレトリックにもそのポリティカルな要素が明白に現れている。しかし、ポリティカルと時にいわれ、レトリックが突出しているように見える文章とは、実はその前にさらに大きな力を揮っている知的な枠組みがあって、それへの反作用としての性格を必然的に帯びてしまうという場合が多い。レトリックを駆使しないテキストはあり得ないし、それは当然、ある立場、ある解釈を呼び出すという点でポリティカルである。例えば次に掲げるのは、川村論文の中の、ワーズワスの『逍遙』第八巻に見える、工場で働く子どもの悲惨さを訴える部分を解説した一節である。下線を施したたった一文で、氏のレトリックは工場に代表される「機械文明」対「自然」という図式で表わされるような意味空間を立ちあがらせ、その中に子どもを置いて見せる。

このブレイクの抱く子どもの未来像への危惧の念は、ワーズワスによっても明瞭に表明されている。産業革命により綿工場ができたおかげで、それまで両親に随って野良仕事に出かけ、遊び戯れていた子どもは、少しでも貧しさから抜け出るため、母親同様、自然を離れ綿工場で働くようになっていった。アダム・スミスの『国富論』(1776)の

主張するような国家繁栄をもくろむ経済政策の奴隷に仕立て上げられてゆく子どもの痛ましい姿を描くワーズワスの怒りを見よ。¹³

ではワーズワスの詩はどのようなレトリックを用いているのだろうか。川村氏の論文では、この後、『逍遙』の中から子どもの痛ましい姿を描く一節が引用されるが、下線を施した文は引用される箇所よりも少し前の部分に関わるので、そこを引用してみよう。

Lo! in such neighbourhood, from morn to eve,
The habitations empty! or perchance
The Mother left alone,—no helping hand
To rock the cradle of her peevish babe;
No daughters round her, busy at the wheel,
Or in dispatch of each day's little growth
Of household occupation; no nice arts
Of needle-work

“The Father, if perchance he still retain
His old employments, goes to field or wood,
No longer led or followed by the Sons;
Idlers perchance they were,—but in *his* sight;
Breathing fresh air, and treading the green earth;
Till their short holiday of childhood ceased,
Ne'er to return! That birthright now is lost.”¹⁴

ワーズワスは、子ども達が工場に行ってしまう、手伝ってくれる娘もなくなった母親と畑や森についてきてくれる息子もなくなった父親を描くことで、

村の暮らしが崩壊の危機に瀕していることを嘆く。詩人の筆は、母親のもとでの娘の労働を慈しみをこめて描き出し (“busy at the wheel”; “each day’s little growth / Of household occupation”; “nice arts / Of needle-work”), 父について畑や森に行った息子の様子を生き生きと描く (“Breathing fresh air, and treading the green earth”)。またここでは、子どもが親といることが幸せなのだ、ということも匂わされている。詩人の言葉は、これらのことをあやまらず伝える。というより、この場合は、これらの言葉が、我々読者の中の、それなら「知っている」「わかる」という感覚と結びついて、上述したような意味と感覚が読者の頭の中に広がる、といった方がいいかもしれない。

長谷川博子氏は、歴史学の新しい方法への提言として、史料の向こうに「現実」があって史料が「現実」や「思潮」を映すのでは必ずしもなくて、「書かれたもの」が、書かれるというまさにそのことによって、「現実」や「思潮」を作りあげていったと考えられるのではないかと、発想の転換を唱えている¹⁵。つまり、ある文字による史料（と後になるもの）が書かれることによって、その時までは当事者の人々の間にもやもやとした感情のような形で潜在的にあったかもしれないが、意識されておらず形もとっていなかった現実の状態に、初めてはっきりとした輪郭が与えられ、それによって人々が事態を把握、意識できるような思考の枠組みがそこで与えられた、と考えられないか、というのである。それは「点線の、より曖昧であった区分線が、きっちりとした抜け道のない実線におき変えられていくよう」な変化であり、それによって周囲の状況も微妙に意味付けられ、意識化されていくのではないかと、氏は提案する。この、テキストが書かれることによって「現実」が、「意味」が生成されていくという考え方は、文学テキストにあてはめて、子どものイメージや意味の生成を考える際にもある程度有効ではないかと思う。

試みに、上に挙げたワーズワスの詩の引用部分をこの考え方にそって読み直してみよう。産業革命の発展の時期に子どもが労働力として使われ、悲惨な生活を強いられたということは疑いない事実である。ただ、それ以前の状

態において、子どもは両親と野良仕事をし、自然の中で暮らしていたかもしれないが、「産業革命以前」に「自然」の中にあることが、当事者や当時の人々に、積極的な価値を帯びた幸福な状態と意識されていたかどうかはわからない、と考えてみたらどうだろう。農家ではそういう生活が行なわれていたが、当人達にとってそれほど特別な意味づけを与えられていず、別の書き手が観察し、記述したら、別様にも書けたかもしれないような状態だった、と仮定してみるのである(事実としてどうだったか、はこの際度外視する)。しかし、ワーズワスはこの状況を、上に挙げたような言葉を使って表現することによって、例えば(工場の「反自然」に対する)「自然」の良さ、(非人間的な労働と異なる)家庭での労働と炉辺の幸せ、という図式で表されるような、紛うかたない価値を帯びたものとして意味付けた(もちろん、産業革命の波によって脅かされることになって初めて、「対比的に」これらのものの価値が認識されたということは忘れてはならない。我々は何物も、他の物との差異を通してしか認識・把握できない)。そして、いったんこのように意味付けられ、言葉にされてしまうと、人々は自分達の置かれていた状況を、専らその図式で把握し、意識するようになる。家庭の手仕事も、子が親について野良へ行くことも、「機械文明」対「自然」に近い「田園」の暮らしという図式の中で認識される。「機械」「工場」と対立するものとしての「野良仕事」や「親子の幸せ」などの意味が立ち上がり、この意味空間の中におかれる。

ここで「実験」に使ったワーズワスの詩の一節は、任意に抽出したものであるが、ある子どもについてのテキストが書かれるとは、このようにして、子どもをめぐる環境を、一つの意味付けられた空間として把握するための知的枠組みを与えるものではないか、というモデルとして強引に示してみた。その後、さらにそのテキストを同じような方向で解説するテキストが書かれたり、同趣旨の別のテキストが書かれたりして、枠組みは強化され、深まり、認識が広まっていく。たとえば百数十年を隔てて、ワーズワスの詩を解説する川村論文は、さらにその枠組みを強化し、書き加える役割を果たして、子

どもは、「機械文明」対「自然」という枠の中で、両親のもと、自然を享受し遊び戯れていた子ども、というはっきりしたイメージによって描かれるのである。

子どもに関するテキストが書かれ、読まれる場とは、このようにして子どものイメージが構築され、強化され、また作り替えられるという形で、不断に子どもに関する「意味」が切り出される、レトリックのせめぎあう場であったのではなからうか。とりわけ子どもに関する場合、我々は文学作品や様々なテキストの中で言葉にされ、また画像や映像で表わされた子どものイメージを通してはじめて、我々の身近にいつもいる子どもを認識することができてきたという感さえある。文学における「子ども」のイメージを追うとは、そのようなレトリックが書かれてきた歴史、それを我々が読んできた歴史、を読むことであろう。

文学研究の分野で、女性をめぐる定義については活発に議論がなされた。しかし、母性や女性性が歴史的構築物だと論じるフェミニストでも、子どもに関しては、あまりつまこんだ議論をしていることがないように思われる¹⁶。それはなぜなのだろうか。家族、母性といったことと抱き合わせて論じられることが多かったからなのか、それとも子どもと親の関係や「子ども」なるもののありようは、より本質的で、「自然」に見えるからなのか。後者だとすれば、それはとりもなおさず、我々がその類のイデオロギーにとりこまれ、その大きな枠組みのなかにいるということではないかと問う必要がある。また、文学作品における子どものイメージを論じて、ともすれば、アプリオリな子どものイメージがどこで現れているかを求めたり、あるいはこの時代のこの作家はこういうイメージを（子どもについて）抱いていると結論づけて終わってしまうことになりがちである。大事なのは、すべての子どもに関するテキストは、上で述べたようなレトリックを用いて、それが構築する「現実」を我々に見させようとする働きをもつものだとすることを意識して、一つ一つのテキストを、そのレトリックに注目しながら読むことではないだ

ろうか。それによって、テキストの向こうに性急に「現実」や「本質」を見に行こうとするのではなく、逆に、我々がテキストによって誘われていく知的な枠組みをも相対化し、問いなおす契機が生まれるかもしれない。

注

- 1 猪熊葉子「ファンタジーの系譜」、猪熊葉子・神宮輝男『イギリス児童文学の作家たち——ファンタジーとリアリズム』(東京: 研究社, 1975) 3.
- 2 先ごろ刊行された「英国文化の世紀シリーズ」第一巻『新帝国の開花』でも、『『子どもの世紀』の光と影』と題する一章が設けられ、「はしがき」においてこの章では『『子ども』の発見という近代文化史の大きな文脈のなかで、ルソー『エミール』(1762)のイギリス文学への影響が語られる』と紹介されている(『英国文化の世紀 1 新帝国の開花』[東京: 研究社出版, 1996] iii)。
- 3 猪熊 3-4.
- 4 このカヴニーの著作と、後に取りあげるアリエスの著作の解説は、江河徹氏が『『子どもの世紀』の光と影』という論文の中で行っている(『英国文化の世紀 1 新帝国の開花』[東京: 研究社出版, 1996] 195-217)。
- 5 Peter Coveney, *The Image of Childhood: The Individual and Society: A Study of the Theme in English Literature*, Rev. ed. (Penguin Books, 1967) 29. 日本語訳は江河徹監訳『子どものイメージ』(東京: 紀伊国屋書店, 1979) からお借りした。
- 6 Coveney 31.
- 7 フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生——アンシャン・レジーム期の子供と家庭生活』杉山光信・杉山美恵子訳 (東京: みすず書房, 1980) 49-50.
- 8 アリエスの仕事の評価については宮澤康人編『社会史の中の子ども』(東京: 新曜社, 1988), 森田伸子『子どもの時代——『エミール』のパラドックス』(東京: 新曜社, 1986)を参照。また、英文学における子どものイメージを研究したDavid Grillsなども、アリエスの中世に対するあまりにノスタルジックな態度を批判している(Grills, *Guardians & Angels: Parents and Children in Nineteenth-Century Literature* [London: Faber & Faber, 1978] 18)。
- 9 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』(東京: 勁草書房, 1989) 7.
- 10 中河伸俊, 永井良和編著『子どもというレトリック——無垢の誘惑』(東京: 青弓社, 1993)はアリエスの方法を継承するとうたって、日米のコミックや子どもに関する法律などを論じた論集。
- 11 川村民部『ロマン派の子ども像——ブレイクとワーズワス——』, 松村昌家編『子どものイメージ——十九世紀英米文学に見る子どもたち——』(東京: 英宝社, 1992) 4-

5.

- 12 そうした思考の枠組みの存在は、すでに柄谷行人氏によって日本近代文学の文脈において指摘されている。柄谷氏は、『日本近代文学の起源』(東京: 講談社, 1980)において、(人間の)「内面」や「風景」が一つの制度であって、西欧においてはその成立の過程が緩慢であったのに対し、日本の明治期においては急速に成立し制度化されたのでそれが見やすいのであるということ、そしていったん成立してしまうと、我々がその中にあるためにその制度そのものとその歴史性が見えないのだ、ということを書いていて——「風景がいったん目に見えるようになるやいなや、それははじめから外にあるようにみえる。ひとびとはそのような風景を模写しはじめる」(29)。それと同じ方法で、柄谷氏は「児童」も「風景」と同じく発見されたものであり、それにもかかわらず今日「子ども」はあまりにも自明であるために、我々はその歴史性を見失っているのだと主張する。「児童文学者たちが『子ども』という観念をうたがわれないばかりか、さらに『真の子ども』を追求しようとしているのは、児童が事実として眼前に存在しているからである。風景と同様に、児童は客観性として存在し、観察され研究されている。そのことを疑うことは困難である。しかし、児童に関する“客観的”な心理学的研究が進めば進むほど、我々は『児童』そのものの歴史性を見失っている。むしろ児童は昔から存在したが、我々が考えるような、対象化するような『児童』は、ある時期まで存在しなかったのだ。」(146)と言うときの柄谷氏はアリエスと殆ど同じ観点に立っているように見える。

13 川村 20-21.

14 William Wordsworth, *The Excursion*, Book VIII, 265-272, 276-282, in *The Poetical Works of William Wordsworth*, eds. E. de Selincourt and Helen Darbishire, vol. 5 (Oxford University Press, 1966) 273-274.

15 長谷川博子「歴史のエクリチュール——『女の場』をめぐる」, 小林康夫・船曳建夫編『知の論理』(東京大学出版会, 1995) 272-286.

16 バーバラ・ドゥーデン『胎児へのまなざし——生命イデオロギーを読み解く』田村雲供訳 パンセ叢書1(京都: 阿咩社, 1993)は、子どもではなく、胎児へのまなざしの中に潜むイデオロギーを果敢に論じたもの。

Synopsis

The Rhetoric concerning Childhood

Tae Yamamoto

Today it is customary, in discussing the modern situation in relation to children, to say that “the child was discovered in the modern age,” i.e., the concept of childhood as we understand now is a modern concept. It seems to me, however, that the term—the “discovery of the child”—has been repeated rather carelessly, ignoring the fact that it was used in rather different tones by critics and scholars.

Two books seem to have been particularly influential in propagating the thesis that “the child was discovered in the modern age”: Peter Coveney’s book *The Image of Childhood: The Individual and Society: A Study of the Theme in English Literature* (1957) and *L’enfant et la vie familiale sous l’Ancien Régime* (1960) by Philippe Ariès, translated into English in 1962 (*Centuries of Childhood: A Social History of Family Life*).

A French historian, Ariès claims in his book that the Child as we understand it now did not exist in the middle age; the modern concept of Child developed as the bonds of the community in the *ancien régime* were weakened and the modern nuclear family came into being. His book had great impact because it emphasized the relativity of our concept of childhood by putting it in historical contexts. Books written under his influence therefore tend to question, and try to displace, our concepts of Child, parenthood, family relationship, and so on, by stressing their relativity and dependence on historical situations.

While Ariès treats the situation in France from the middle age to the 18th century, Coveney concentrates on the English literary scene at the turn of the 19th century, going down to the early 20th century. He explains how, at the beginning of the 19th century, the image of “an Innocent Child” became an important vehicle by which great Romantic poets and great novelists, particularly Dickens, expressed their messages and views of life; for them, the child became the symbol of Nature itself and of their objections to the ugly industrial age. Both Ariès and Coveney discuss the development and change of the concept of child in historical contexts. As Coveney’s argument of the Romantic view of childhood was acclaimed and repeated in books and articles treating the image of the child in English literature, however, the arguments concerning the “discovery” of the child seem to have acquired a rather different tone from that of Ariès and his followers. Sometimes the change which occurred in the Romantic period was explained as the process in which the inherent value of childhood and the true nature of the child, which had been wrongly ignored up until then, were finally discovered and appreciated.

These examples show how the thesis that “the child was discovered in the modern age” could be interpreted and described in different ways by means of the rhetoric used by the writers of the texts. It is not my intention here to discuss which way of viewing the child is better or right; rather I want to call attention, through these examples, to the fact that our view of the child or childhood is molded by this rhetoric.

The Japanese historian Hiroko Hasegawa proposes a new way of examining historical documents. So far many historians have regarded documents as evidence reflecting the facts and situations in the past, through which they might get at the realities and trends of thought of the previous ages. Hasegawa

suggests, however, that it is possible to think that a document itself, in being written, may have constructed “reality” and “trend”; when something is written on paper in a certain situation, that written text provides the people concerned with a framework through which they might comprehend the situation they are involved in, though they may not have been conscious of their situation in that way before. I think this way of thinking is applicable to examining the rhetoric of literary texts and criticisms. Examining a passage from Wordsworth’s *The Excursion* in this way, for example, we can analyze how the poet’s rhetoric constructs the framework which could be summarized as the opposition of factory vs. country life, and puts all the elements described in the passage into that framework. Once the “reality” in which they live is put into words in this way, people come to grasp the “reality” through that framework, and the interpretation and criticism of the poem written later also help to strengthen and give credence to the framework.

Every text concerning Child invites us to see the “reality” it constructs by means of its rhetoric. To trace the changing image of childhood in literature should be regarded as an attempt to examine how such rhetoric has been written, and how we have interpreted such rhetoric.